

るにうもつて、あ國の中にも、明王の歌、永壽堂法
 師等と市中の虎、騰龍花の五幸の中、なぶか如しけ侍
 るも、沙門持戒の数、文らど還俗の禪門とありて
 世を汚さず人の信施を受けず、まゝ為のみ。今日の名聞
 の事、よきこととまた、門よりあづかるも、明らかなる事よ
 きとして、地獄の門より入る事、決定なり。おきてこそ
 佛法せよとのほきあるも、あやかし長くして、説法
 せられしところ、依此説法、諸士羞ぢの女中もある
 らぬが、高擡丈夫の心を奪ひ、木柳の糸を解せ

る事と観念の統一の爲めと
決て感づる

刑原記卷之第一終